

## 第 8 回 ECE WG 会合議事録

日時：3月24日（月） 10:00～12:00

場所：日本工学会事務所

出席者（順不同、敬称略）：

主査 川島 一彦（東京工業大学大学院 教授）

委員 高草木 明（東洋大学工学部建築学科 教授、建築分野）

中崎 良成（NEC ラーニング 執行役員フェロー、基礎分野）

永田 一良（日立製作所研究開発本部 技術主管、日本技術士会）

持田 侑宏（フランステレコム(株) CTO、電気分野）

事務局 柳川 隆之

配布資料：

ECE07-8-1 第7回 ECE WG 議事録（案）

ECE07-8-2 ECE プログラム検討ワーキンググループ中間報告（川島主査）

ECE07-8-3 ECE 研修の考え方、位置づけ（中崎委員）

### 議 事

#### 1. 前回議事録確認

3月10日の第7回会合の議事録案が配布された。

#### 2. 中間報告書の検討

川島主査から、これまでの議論に基づいて作成した平成19年度の活動報告書の案が説明された。引き続いて、中崎委員からバランススコアカードの考え方をベースにまとめたECE研修の考え方と位置づけが説明された。議論の結果、中崎委員の検討結果は、ECEはプロフェッショナルなエンジニア育成を狙いとするものという考え方が分かるように修正を加えたうえで中間報告書に盛り込むことにした。中間報告書はメールで仕上げの議論をして完成させることになった。

議論の概要は次の通りであった。

\*グローバル化を中期的な視野に加えてはどうか。（持田）

\*土木と建築では、土木の方が国際化が進んでいる。電気や自動車など製品が単独で売れる分野と土木建築分野はまた異なっており、分野による温度差が大きい。（高草木、川島）

\*中間報告書案の表1は、表2よりECEの特色をよく表している。表現を短くする工夫があるとよい。（中崎）

\*企業の経営者に訴えるものがないといけない。経営者が受講者を派遣したくなるようなキャッチフレーズ（例えば、欧米の後追いでは駄目。）を受ける形で項目を並べるとよい。（永田）

\*企業はこれまで自社にないものを求める。元来は経営者に期待することであったが、技術者にも必要であり、これがECEのテーマである。例えば、企業の持続性。（中崎）

\*企業の従業員に安住している技術者でなく、生涯学習を続けるプロフェッショナルな技

術者を対象としたのが ECE である。(持田)

\* 効率性を求める企業ではプロフェッショナルな技術者の育成に手が出ない。(中崎)

\* 企業から離れた学会はプロフェッショナルな技術者にとって必要な組織である。(高草木)

\* 社会貢献は企業にとって飾りであり、企業はこれに目を向けるか？(川島) ⇒ 社会貢献が利益の先にあることは大體理解されている。プロフェッショナルについて日本技術士会でも議論したが、企業の中では技術者はプロフェッショナルとは認められていないという結論であった。これでいいのだろうか？(永田)

\* テキサスインスツルメント社ではコンプライアンスが利益につながると明確に打ち出している。(永田) フランステレコム社でも Code of Ethics は企業の価値であると表明している。Code of Ethics を前面にとらえてプロフェッショナル技術者を育てるとするのがよい。(持田)

\* 社会貢献と利益は明確に区別できない。(高草木) 両者がマッチするのが理想である。(川島)

\* 日本の技術者は企業という閉じた環境の中で活躍し、米国のセカンドライフのようなものに目を向ける余裕がない。社会貢献というのはボランティア活動とは異なるものである。(中崎)

\* グローバルに通用するプロフェッショナルエンジニアを育てるべきということか。(永田)

\* 社会貢献を社会意識としてはどうか。(高草木)

\* 中崎委員の資料の第 3,4 ページの図は、川島主査と相談して修正して、中間報告書に入れる。(川島)

\* 動機や価値観のしっかりした受講者を選別するというプロセスを経る必要がある。(持田)

\* トップ 10%の技術者を対象とするといいで、トップ 10%になる技術者を育てるとすべきである。(中崎)

### 3. 来年度以降の進め方

協議会総会で検討を継続することが承認された場合は、来年度は次の活動を行うことにした。

1) 企業へのヒアリング調査を行う。

2) 検討だけではなく、日本工学会のなかで事業計画(組織、仕組み、費用など)を作り、年度後半に 1,2 のプログラムを試行することを目指す。そのために、現在の WG のメンバーを核にして、分野別のグループを作る。化学分野のグループは橋谷運営委員に相談する。4 月後半から活動を開始し、8 月ころまでに ECE の具体像と事業計画を固める。

議論の過程で出された意見は次のとおりである。

\* 知名度の点で、主催者は日本工学会だけより分野別協議会も入れてはどうか。(高草木)

\* 企業からどれだけ支持か得られるかが問題である。経営者向けのプログラムはよいが、技術者向けプログラムの必要性が認められるかどうか問題である。(中崎)

\* ヒアリング対象者は人事系とするか技術系とするかによって十人十色の結果が出る。

(中崎)

\*ヒアリング調査には ECE の具体像を示せるとよい。来年度前半でこれを行う。(川島)

\*ECE で最先端技術や将来像を議論するには、その前に勉強が必要である。これは CPD である。従って、CPD と ECE は車の両輪といえる。(中崎、永田)

\*具体像検討のためにどういうグループを組むか？この WG メンバーを核にして分野別の人材を増強したらよいのではないか。化学分野から活動して頂ける委員がほしい。運営会議の橋谷委員に相談してはどうか。(川島)

以上